

居 場 所 作 り

事業名称

誰もが集まり楽しめる場所作り

- 生活支援
- 買物支援
- 移動支援

- 見守り
- 居場所作り
- 協議体

市町村名：天草市
部 署 名：北包括支援センター
連 絡 先：0969-32-2115

地域の概要

古くから漁師町として栄え、昔ながらの風景や海の自然が残っている。

五和町二江の高齢化率は 52.3%。西三地区は世帯数 80 件。そのうち 65 歳以上（一人暮らし 26 件、夫婦 2 人暮らし 23 件）

小中学生は 7 人という高齢者地域である。



「脳いきいきサポーター協力にて、
地域カフェクローバー開催」

取組みの背景

以前から高齢者の方より、「通いの場が近くにあったら行きたい。」という声が出ており、包括の前任者の SC が通いの場立上げに向けて動いたが、代表者問題や、新型コロナなどで立ち上げることができなかった。

高齢者の多い西三地区に是非通いの場を立ち上げてほしいという前任 SC の想いを受け継ぎ、西三地区の区長に公民館で脳トレや健康体操、通いの場について話しをさせてほしいと伝える。

実施までの流れ

区長に相談

- 地域カフェクローバー（包括主催の高齢者を主体に公民館に集ってもらい、講話や健康体操、脳トレ、談話などを行い楽しんでもらう。）を開催したいと伝え、開催予定のチラシ配布をお願いする。
- 地域カフェクローバー開催（脳いきいきサポーター*）に依頼し、2名協力あり、住民 15 名参加、通いの場について話をする。）
- その場で立上げ決定！！

*）脳いきいきサポーターとは認知症を予防する方法を楽しく学び、地域に広げる活動をしていただく方

取組みの概要

- ・地域カフェクローバーを開催し、今後、地域で支え合う事の大切さや集まる場の必要性を伝える。
- ・気軽に集まって体操ができる通いの場を紹介。
- ・その日に通いの場の立ち上げ決定。
- ・通いの場「西三こんぴら会」として活動開始。
- ・区長が代表となり、支援者2名（1名は脳いきサポーター）もすぐに決まる。

毎週木曜日 14:00~15:30

西三自治公民館 参加料無料

- ・毎週12~13名程集まり、百歳体操や茶話会などいつも賑やか。
- ・支援者の脳いきいきサポーターは高齢の方の話し相手や見守りなどされる。
- ・包括SCも時々訪問し、フレイル予防などの啓発活動行う。



「通いの場立ち上げ時、初めての百歳体操」

生活支援コーディネーターの役割

「住民の声を聞く」 「区長に相談」 「脳いきいきサポーターに協力依頼」

「実際に集まる場を開催してみる」

- ・区長と顔見知りになっていたこともあり、相談しやすかった。
- ・まずは集まる場を設け、皆さんに健康体操や脳トレなどに取り組んでもらう。また、地域の助け合い支え合いの大切さを話し、通いの場の必要性を伝える。

今後に向けて

通いの場の参加者が減少している中、新たに立ち上げることは難しくなっている。また、70代前半の方などは仕事をしている方も多く、サポートしてもらえる方も少ない。

しかし、SCが地域に入りきっかけ作りをする。地域の助け合い支え合いが今後増々大切になってくることを伝えていくことで、区長や民生委員など地域の為に活躍しておられる方々が、過疎化している地域だからこそ集う場の必要性を理解し協力してもらえるようになるのではないだろうか。

通いの場は住民主体だが時々SCなど訪問し、継続支援を行うことで今後も繋がって行くと思う。

事業名称

天草市倉岳町浦地区の集まる場について

- 生活支援
- 買物支援
- 移動支援

- 見守り
- 居場所作り
- 協議体

市町村名：天草市

部署名：天草東地域包括支援センターあじさい

連絡先：0969-66-2266

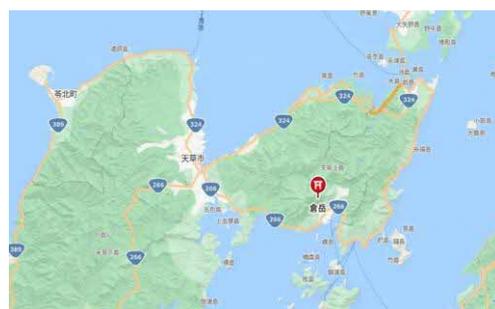
地域の概要

倉岳町は天草市上島の南東部にあり、浦・棚底・宮田の3地区で構成され波静かな不知火海、北東部は天草最高峰倉岳・念珠岳・龍ヶ岳山系からなる観海アルプスに面し平野部が少なく、海岸部のわずかな傾斜地に集落と農地が展開している。

その中の浦地区は農業が中心な地域。

R4年度 倉岳町全体人口：2,556人 高齢化率：51.06%

浦地域の人口：603人 高齢化率：53.3%



取組みの背景

東地域包括支援センターあじさいでは地域の課題や体制作りについて地域の中心となる方や、地域のために何かしたいと考える方たちをわがまちサポーター^{注1)}として登録し、地域づくりの担い手を養成している。

そして、サポーター同士で地域について思うことを話し合う場として座談会を開催した際に、通いの場やサロン以外でも高齢者の方が交流できる場を作りたいという声があがり、地域で話し合うこととなった。

注1) わがまちサポーターとは、地域を見つめ、わがまちの為に何が必要か、何が出来るのかを共に考え取り組んでいただく方

実施までの流れ

サポーター同士の話し合いをすすめる中で、地域に高齢者の集まりの場をつくりたいと思っていた方と脳いきいきサポーター^{注2)}として活動の場を探していた方がつながり、集まりの場が立ち上がることとなった。

わがまちサポーターと脳いきいきサポーターと話し合いを重ね開催に至った。

注2) 脳いきいきサポーターとは認知症を予防する方法を楽しく学び、地域に広げる活動をしていただく方

取組みの概要

- サポーターの意見を聞く（目標など）
- 立ち上げ準備
 - ・協力者：脳いきいきサポーター2名
 - ・開催場所：浦5区 H氏自宅離れ（トイレがないため自宅での使用）
 - ・地域の方への声かけ（自宅周辺～地域へ）
- 包括の関わり
 - ・わがまちサポーターと脳いきいきサポーターと情報共有
 - ・地域活動の情報提供

- 開催日：毎月第2・4月曜日 9:30～12:00
- 参加人数：7～8人
- 利用対象者：浦地区住民（開催場所周辺住民）
- 内容：体操、歌、パズル、脳トレ、茶話会、昔話など



脳いきいきサポーターによる脳トレ活動支援の様子

生活支援コーディネーターの役割

- 地域の座談会、住民同士の意見交換会の開催
- 住民へのアンケート調査の実施
- 関係機関との情報共有
- 地域資源の情報収集
- 地域の生活環境・課題・人材の把握
- わがまちサポーターと脳いきいきサポーターのマッチング

今後に向けて

浦地区で集まる場の立ち上げ後棚底地区でも住民主体で集まる場が立ち上がった。一方では、地域の方が通える集まりの場が減少している。今後も集まりの場が継続できるよう支援していこうと思う。そのためには集まりの場の必要性や地域の方とのつながりを大切に地域の資源や地域の状況把握を継続していこうと思う。

事業名称

有明町楠甫地域 はまぐり 蛤 地区の集まる場について

- 生活支援
- 買物支援
- 移動支援

- 見守り
- 居場所作り
- 協議体

市町村名：天草市

部署名：天草東地域包括支援センターあじさい

連絡先：0969-66-2266

地域の概要

有明町は天草市上島の北東部にあり、島子・下津浦・上津浦・赤崎・須子・大浦・楠甫の7地域で構成されている。その中の楠甫地域は5地区で構成されている。

楠甫地域の蛤地区は海岸付近にあり、漁業が盛んな集落。人口：127人 高齢化率：47.2%
地域の集まりもなく、活動が衰退している。



【赤枠が楠甫地域】

取組みの背景

この有明蛤地区には老人会やグラウンドゴルフの集まりがなく、活動が衰退しており、包括支援センターあじさいでは地域の集まる場の必要性がある地域と考えていた。民生委員児童委員協議会の定例会等で、集まる場の大切さや集まる場を作りたい時は声をかけてほしいと呼びかけていた。

その後、地区の民生委員さんから声がかかり地元の公民館が活用されておらず勿体ないとの事、集まりの場を作るのに協力してほしいと相談があった。

実施までの流れ

包括支援センターあじさいより地域へ出向き、住民へ集まりの場の重要性を伝え、どんなことに関心があるのかアンケートを取った。話し合いを重ね、住民のみなさんがクリスマスリース工作材料を持ちより、みんなで工作をすることから始まった。住民が集まる立ち上げのきっかけ作りができた。

取組みの概要

【活動が始まった頃】

- 開催は月1回
- 材料・機材を持ち寄り、工作やカラオケを行う
- 包括の関わり
 - ・活動支援
 - ・地域の活動について情報提供

クリスマスリースを制作している様子 →



【現在】

- 開催日：毎月第1・3木曜日 10:00～12:00
- 参加者：蛤地区住民 10名程
- 参加費：500円/回
- 活動内容：百歳体操・脳トレ・茶話会

脳トレプリントに取り組む様子 →



生活支援コーディネーターの役割

- 住民との座談会の開催
- 住民への興味関心アンケート調査実施
- 関係機関との情報共有
- 継続支援

今後に向けて

- ・集まる場が長く活動していけるよう、継続支援として定期的に訪問等していく。
- ・参加や活動のきっかけとなるよう、活動を地域の方に周知していく。

事業名称

地区福祉活動をベースにした地域のつながりづくりの構築

- 生活支援
- 買物支援
- 移動支援

- 見守り
- 居場所作り
- 協議体

市町村名：宇城市

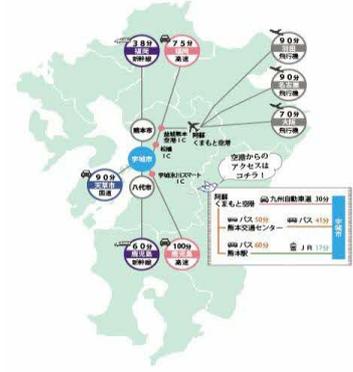
部署名：宇城市地域包括支援センター

連絡先：0964-25-2015

地域の概要

平成17年5町が合併して宇城市となる。九州、熊本県の中心あたりに位置し、九州新幹線、JR鹿兒島本線、九州自動車道、国道3号線が走っている。西は天草、東は宮崎県との結末点。また、山や平野、海と多様な自然を有して自然環境と都市機能を併せもった地域。

総人口：55,722人
(令和7年11月時点)
高齢化率 35.6%



取組みの背景

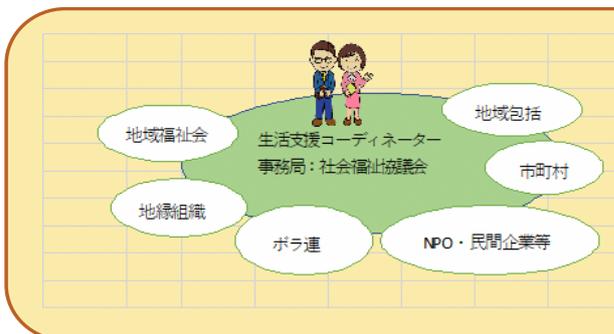
地区福祉は地域社会で誰もが安心して暮らしていくための地域福祉を推進する「自治組織」。本社協では健康で誰もが安心して暮らせる地域社会を目指して、平成18年より地区福祉会の設置を全職員で取り組み推進してきた。

現在、行政区ごとに139地区が設置し、自治会長、民生委員、婦人会、老人会、健康推進員、ボランティアなどで構成されている。月1回のふれあい交流活動や見守り活動、福祉会ごとの特色のある活動が展開されている。この地区福祉活動を支援、継続させていく事が地域のつながりや自助をうみだす活動につながっている為に福祉会の立ち上げ、運営に力を入れてきた。

実施までの流れ

社協の地域福祉の推進活動として地区福祉会設置は以前より取り組んでいた事であった為に、その福祉活動を基盤として何が出来るかを社協生活支援コーディネーター（以後SCと省略）にて話し合い、実施していく事を検討した。

生活支援体制整備事業での5町の協議体の設置、また事業の概要や取り組みの研修、協議行い、共通認識をはかるとともに、グループワークを実施し各町の課題収集を行った。



取組みの概要

① 各町に福祉座談会や地区訪問の実施

ピックアップした地区にて座談会を実施。消防団などの若い世代から高齢者まで参加し、地域の空き家や世帯状況、要援護者などの把握をしながらマップに落とし込みをしていき、地区の具体的な互助の状況や課題把握を行った。また、活動が不規則な地域に対して SC が体操やゲームなどの活動を取り入れ、交流することの楽しさを伝えながら活動につなげていった。

② 地区福祉会リーダー研修会の開催

地区福祉会役員や行政区長、民生委員などを対象に生活や福祉課題などの地域課題を考える機会にするための研修会を年1回開催。SCにて企画運営を行うとともに、普段の地域活動の発表の場にもなった。活動報告例) 地区見守り隊活動、地区行事が盛んな地区の取り組みなど

③ 地域資源、マップの作製

地域にある高齢者の生活を支えるサービスや助け合いの実情を把握するための資源マップ作製を行った(冊子・電子媒体)各町ごとに商店、飲食店、移動販売、通いの場、趣味活動など掲載。冊子は地域のケアマネジャーをはじめとした福祉関係者等に配布。電子媒体の作成には地元の工業高校の電子科の協力を得る事ができた。

④ 通いの場づくり

社協で実施している通いの場推進にて、いきいき100歳体操(98箇所)、脳いき教室(64箇所)、健康マージャン教室、ノルディックウォーク教室など実施。元気な高齢者を増やし、高齢者が活躍できる地域をつくるため、社協、SCときっかけづくり、支援を提供している。



①地区座談会



③通いの場冊子



④多様な通いの場



②リーダー研修



生活支援コーディネーターの役割

本社協は総務課、地域福祉課、地域包括支援センターの3課に分かれている。SCは5町ごとにわかれ、職員3~5人を課の枠を越えてチーム編成し活動している。各課何らかの形で地域に出向く中から個別支援と地域支援を展開。

普段より住民とのつながりと関係性の強化を図る事を意識し取り組んでいる。(役割): サロン等への訪問・地区の情報収集・要援護者の把握・ニーズの確認・支え合い活動等の把握・介護予防体操や脳トレの実施・福祉座談会の開催・幅広い関係分野とのネットワーク作り・地区行事活動への参加。

今後に向けて

これまで順調に構築してきた地区福祉会であるが、これまでの参加者の高齢化、地域リーダーの世代交代、担い手不足といった課題があり設置した福祉会を継続させていく事が課題としてある。

「参加してみよう」「お手伝いしてみたい」と思ってもらえる為には既存の取り組みでは難しいと感じており、SNS ツール (Facebook、Instagram) を使った啓発や、魅力的な企画の検討など知恵とアイデアを駆使する必要性が出てきている。また、マンパワー不足を補う為に、動画を制作し福祉会活動の中で活用してもらうことをすすめている。

事業名称

長洲町社会福祉協議会「介護予防リーダー」 (元気あっぷリーダー養成)

- 生活支援
- 買物支援
- 移動支援

- 見守り
- 居場所作り
- 協議体

市町村名：長洲町
部署名：地域包括支援センター
連絡先：0968-57-8336

地域の概要

- ・長洲町の人口：15,097人(令和7年10月末時点)
- ・65歳以上：5,645人(全体の37.4%をしめる)
- ・世帯数：7,464人
- ・2025年から2030年の5年の間に、高齢化率が急激に伸び、要介護状態の方が増加、要介護状態になっても受け皿がなく、全員が必要な介護サービスを受けられない状態が予測される。そのために、早期の健康づくり・フレイル予防が必要である。



高齢者支援施設 げんきの館

取組みの背景

- ・2016年度介護予防・日常生活支援総合事業開始
- ・高齢化率の上昇：2009年度26.1% ⇒ 2024年度37%の推計、人口減
- ・2011年度より、長洲町において介護予防拠点施設の整備が本格化
6か所 ⇒ 21か所 ※2015年度には32か所へ増加
- ・介護予防拠点施設の整備に伴い、活動回数の増加
⇒介護保険認定率の低下へ(20.5% ⇒ 2015年度17.5%)
介護予防拠点施設での介護予防活動の一環として、元気あっぷ体操教室を順次開始した。

実施までの流れ

- ① 2015年、町長・町福祉保健介護課長他職員・社協職員にて、先進地視察
- ② 生活支援コーディネーターが、生活支援サポーターに声掛け
- ③ 講師を地域リハビリテーション支援センターへ委託
- ④ 2016年活動支援として養成講座開催「介護予防リーダー養成講座」全8回
(内2回活動準備講座) くまもとホクホク体操
- ⑤ 修了認定 元気高齢者活躍の場
 - ・「元気あっぷリーダー」として登録 ⇒ 地域の区長等との会場や曜日、時間の選定
 - ⇒ 住民主体のリハビリテーションのノウハウを取り入れた体操教室の実施

取組みの概要

- ① 「長洲町介護予防リーダー養成講座」を受講
- ② 「元気あっぷリーダー」として登録
- ③ 地域で開催される「元気あっぷ体操教室」の指導者として活動。その活動を支援するため、フォローアップ研修会も開催。
- ④ 介護予防事業として地域住民へ「長洲町元気あっぷ体操教室」への参加促し、転倒予防運動・認知症予防運動などを習得し、住民の運動習慣化を推進する。
- ⑤ 2025年現在、第16期生まで養成し、74人が介護予防拠点施設26か所で活動中。



生活支援コーディネーターの役割

・高齢になっても自分のまちで暮らしていけるように、地域住民が支えあう仕組みをみなさんと一緒につくっていく。また、地域の皆さんと情報を共有する場や、地域活動の応援など、誰もが安心して暮らせる地域づくりのお手伝いをする。

- ① 地域ニーズと資源の状況の見える化、問題提起
- ② 地縁組織等の多様な主体への協力依頼等の働きかけ
- ③ 関係者のネットワーク化
- ④ 目指す地域の姿・方針の共有、意識の統一
- ⑤ 生活支援の担い手の養成やサービスの開発（担い手の養成、組織化、支援活動につなげる機能）
- ⑥ 地域住民のニーズとサービスのマッチング

今後に向けて

・元気あっぷリーダーや参加住民の高齢化が課題となっているため、以下のことについて検討を行い、活動の活性化と介護予防運動の啓発を引き続き行っていく。

- ① 体操に参加して腰やひざの痛みがなくなった等、良かったことを伝え声掛けにてPR
- ② 元気あっぷ体操の体験会の実施
- ③ 各地区で元気あっぷ体操が行われているスケジュールを広報にて定期的に知らせる。
- ④ 年間参加大賞に記念品を差し上げる。
- ⑤ 介護予防拠点施設での元気あっぷ体操教室においては、年1回の体力測定会を実施。体力低下を早期に把握し低下を防ぐ。
- ⑥ 地域におけるコミュニティの活性化、交流の活性化による互助力の維持を支援。

事業名称

介護アシスタント

- 生活支援
- 買物支援
- 移動支援

- 見守り
- 居場所作り
- 協議体

市町村名：大津町
部署名：介護保険課
連絡先：096-292-0770

地域の概要

町中央部を東西に国道とJRが通っており、商店や住宅が広がる。北部や南部は田畑が広がる農業が盛んな地域。

人口については、町全体では、住宅地の開発などで総人口は増加が続いている。高齢化率についても県内他市町村に比べて23.2%（令和7年3月末時点）と低いものの増加傾向にあり、高齢者人口も増えている。

町中央部では、住宅地やアパートが増え、特に新たに転入してきた住民との関係の希薄化が課題。

北部や南部は、米やカライモ等の農家が多く、地域行事等が盛ん。しかし、人口が減少し、高齢化率が90%を超える地区もある。



取組みの背景

就労的活動支援コーディネーターが町内の介護保険事業所を巡回訪問し、ヒアリング・現状調査を行ったところ、町内においても専門職の人材不足の課題が聞かれた。加えて、介護保険事業所内での専門職の業務では、専門性を必要としない業務（配膳・下膳、髪乾かし、洗車等）も専門職が担っていることがわかる。

そこで、介護予防サポーター養成講座修了生の今後の活躍の場や窓口での住民からの要望等のニーズを集め、前段の介護保険事業所の専門性を必要としない業務とマッチングさせた。

実施までの流れ

令和2年に就労的活動支援コーディネーターを配置し、

- ①町主催の介護保険事業所連絡会や就労的活動支援コーディネーターの介護保険事業所の巡回等で事業所におけるニーズや現状を収集する。
- ②介護アシスタント説明会や就労的活動支援コーディネーターが通いの場の巡回等で住民側の働きたいニーズを収集し、①とマッチングさせる。

取組みの概要

介護アシスタントの活動内容は、話し相手、髪乾かし、シーツ交換、洗濯物たたみ、配膳・下膳、洗車、将棋の相手等。

年1回程度、介護アシスタント説明会を実施。受け入れを希望する介護保険事業所にも参加してもらいマッチングも同時に実施している。

【マッチング状況】

令和3年度：2事業所3名

令和4年度：5事業所7名

令和5年度：7事業所26名（うち6名）

令和6年度：10事業所17名（うち6名）

令和7年度：9事業所16名（うち3名）

※（ ）内は通いの場からマッチングした人数

就労的活動支援コーディネーターの役割

就労的活動支援コーディネーターが窓口となり、介護アシスタントの受け入れ希望のあった介護保険事業所での業務の切り出し支援を行い、活動を希望するボランティア（介護アシスタント）とマッチングする。

介護アシスタントは、介護アシスタント説明会、通いの場、窓口、保険証交付（75歳）、介護予防サポーター養成講座等で発掘・マッチングしている。

今後に向けて

介護アシスタントは、自身の特技が活かし、社会参加することができた。また、介護アシスタントの中には、活動先の介護保険事業所から直接雇用につながった方もいる。

介護保険事業所では、業務の負担が減っただけでなく、これまでより利用者と関わる時間が増えた。

これからも、高齢者が支えられる側だけでなく、活躍することができる機会を創出する仕組みを継続していく。

事業名称

「かたろう会」高森町しくみづくり会議

住み慣れた地域で自分らしく住みつづけるため

- 生活支援
- 買物支援
- 移動支援

- 見守り
- 居場所作り
- 協議体

市町村名：高森町
部署名：高森町社会福祉協議会
連絡先：0967-62-2158

地域の概要

高森町は九州のほぼ中央にあって熊本県の最東端に位置し、南部は宮崎県西臼杵郡、北部は大分県竹田市に接している。

総面積175.06km²の広い町土を有する農山村地域である。

人口約5,800人、高齢化率は44.7%となっており、今後益々人口減少及び少子高齢化が想定される。

中山間地域が多く、移動手段の確保、担い手不足などにより存在する地域活動の継続が課題となっている。

だが、「結い」は希薄になりつつあるが存在する。



取組みの背景

人口減少や高齢化、担い手不足が本格的に進む本町において、地域の維持・活性化と町民の「^{けんこう}健幸」増進を推進するため、地域課題の把握・解決施策となる地域の仕組みを考えることが重要として旧小学校区単位に協議体「かたろう会」の構築する取り組みを令和2年度から開始。

第1層生活支援コーディネーターを社協に配置（1名）。第2層コーディネーターを国の制度「集落支援員制度」を活用し、健康推進支援員（集落支援員10名）を配置した。

実施までの流れ

1. 第2層コーディネーター・行政と研修等の実施
2. 旧小学校区単位ごと（既存する組織等）に数回の説明会実施



①話し合いの場を設ける

②地域の良いところの再確認・リアルな課題などを話し合う

③地域の活性化組織と協働

④地域住民を巻き込んで実践

取組みの概要

人口減少等を鑑み、新たな組織を構築するのではなく、存在する組織内でかたろう会を位置付け。（活性化組織・自主防災組織等）。

最初に取り組んだのは、協議体メンバーと作成した地区住民アンケート。そのアンケート結果をメンバーで分析し、協議体が主体となり、課題解決を目的とした会議だけでなく、住民の声を起点に「気づき」や「できること」を共有し、福祉教育を取り入れ小さな実践へとつなげていく持続可能な仕組みづくりを進めている。

- ・ アンケートによる対策
 - ・ 「かたろう会」構築に向けた取り組み
（3地区新構築 現在旧小学校区10構築）
 - ・ 学校スクールバスの空き時間を活用した買い物サロン
 - ・ 生活支援の取り組み（地区内の有償ボランティア活動）
 - ・ 通いの場を活用した農福連携
 - ・ 農産物販売
 - ・ まちづくりボランティアセンター協働事業
 - ・ 防災対策
 - ・ 地域団体と連携した活動の場
 - ・ 学校と連携した福祉教育（ふるさと学～こども議会への提案）



かたろう会



生活支援コーディネーターの役割

かたろう会と地域に存在する地域団体など様々な人々が連携を図りながら多様な日常生活上の支援体制の充実・強化及び高齢者等の地域参加の推進を一体的に図っていくため、かたろう会メンバー、第2層コーディネーター（集落支援員）話し合いを進め、住民の地域活動参加へのつなぐ役割を担う。

- ・ 第2層コーディネーター支援・連携
- ・ かたろう会の方向調整
- ・ 地域課題への対応→行政との連携（調整）
- ・ まちづくりボランティアセンター（資源調査）・地域福祉コーディネーターとの連携
- ・ 地域包括支援センターとの連携
- ・ 関係機関・団体・企業との連携

今後に向けて

人口減少と担い手不足の対策を図るためには、この生活支援体制整備事業（地域協議体「かたろう会」）は今後必要な存在になることから別制度と連携するため集落支援員制度を活用して取り組んでいる。

また、持続継続的に実施するため、住民の地域社会参加が自然と生まれるしくみを一人ひとりの小さな「できること」を積み重ねていくことで無理のない支えあいの健幸な地域づくりを進めていく。

行政、まちづくりボランティアセンターと一体となり、かたろう会が未だ構築できていない地域へのアプローチと第2層コーディネーター（集落支援員）配置を目指すと同時に、団体・企業等と連携した新たな取り組みを検討する。

事業名称

週1回の“集いの場”の構築

- 生活支援
- 買物支援
- 移動支援

- 見守り
- 居場所作り
- 協議体

市町村名：西原村
部署名：地域福祉事業
連絡先：096-279-4141

地域の概要

山西団地は、熊本地震後、平成30年に災害公営住宅として建設され、現在は村営住宅として運用されている。全45世帯のうち、65歳以上の高齢者世帯が全体の約3割、そのなかで、単身世帯は全体の約3割強を占めている。



写真：西原村 HP より引用

取組みの背景

各地区の公民館で実施されている65歳以上を対象とした介護予防事業「ミニデイサービス」で山西団地を訪問し、住民の方々と体操やレクリエーションなどを行った。活動終了後には、参加した住民から「楽しかった」「山西団地にも集まりの場があればいいなあ」といった声が聞かれた。こうした住民の何気ないつぶやきが心に残り、“集まる場をつくりたい”という思いが芽生えた。以前は公民館での集まりが存在していたものの、コロナウイルス流行以降は途絶えていた。これらを踏まえ、地域の居場所づくりを復活させるため、公民館を開放し、誰もが気軽に参加しやすいように呼びかけを行い、住民が集まるきっかけづくりに取り組むこととした。

実施までの流れ

- ①区長宅への訪問
地域で集いの場を開催したい旨を区長に伝える。
- ②参加住民への聞き取り
以前、集いの場に参加していた住民に話を伺う。「参加したい」という前向きな意向を確認。
- ③山西団地キーパーソンへの聞き取り
キーパーソン3名に話を伺う。サロン参加の可能性がある住民に自ら声をかけてくださること。
- ④出張版認知症カフェでの周知
認知症カフェ「気晴らしカフェ」の出張版が山西団地で開催された際に訪問。参加者に対し、公民館で集いの場を実施する旨を案内。不参加者へはポスティングで周知を図る。
- ⑤集いの場の開始
令和7年4月23日(水)より、毎週水曜日13:30～15:00まで、山西団地において週1回の集いの場をスタート。

取組みの概要

- ・実施場所：山西団地公民館
- ・参加者：約10名
- ・活動頻度：週1回

七夕の時、区長さんが用意した笹に手作りの飾りを付ける参加者の皆さんの様子。



生活支援コーディネーター含む社協職員が、集いの場が定着するまでは毎週訪問し、参加者の情報収集や活動の進行を行った。現在は月2回程度、集いの場の見守りを行っている。

具体的には、体操や、公民館内にあるトランプ、社協が貸し出しているペタンク・わなげ・モルックなどのレクリエーション用品を活用したゲームなどを紹介。また、言葉遊びや歌詞カードを配布して全員で合唱を行うなど、既存の資源を活かして楽しめるよう働きかけるとともに、集いの場の大切さについても周知した。時には談笑のみの時間を設けたり、参加者が今後取り組んでみたい活動について話し合い、その意見を反映して実現することもあった。(例：七夕づくり)

徐々に集いの場も定着してきており、住民の主体性を尊重しつつ、陰で支える形で関わりを継続している。

生活支援コーディネーターの役割

生活支援コーディネーターの役割として、まずは住民の何気ないつぶやきに目を向け、「こうなってほしい」という声を拾い上げ、実際に形にしていくことが求められる。具体的には、公民館の空き状況の確認や、区長・参加者・運営側の住民への声掛けなどを事前に行い、集いの場の開催に向け基盤を整えた。そのうえで、住民が集まる機会を活用して周知を図り、徐々に参加者の輪を広げていった。

また、個別に住民と話すなかで地区の課題が見えてきたため、そうした課題の解決に向けて働きかけることも重要な役割である。対話の中から得られる情報を大切にしながら支援を行う姿勢が求められる。

今回の取り組みを通して、住民同士が自然と声を掛け合い、協力しながら活動に参加する姿が多く見られるようになった。生活支援コーディネーターが環境を整え、住民が主体的に動けるように土台づくりを行った結果であると考える。

今後に向けて

集いの場が半年経過した段階でアンケート調査を実施したところ、参加者からは「気分転換になった」「交流の機会が増えた」「笑顔で過ごす時間が多くなった」などといった前向きな意見が多く寄せられた。また、「耳が遠く参加するのが億劫」という住民にも個別に声掛けを行ったことで、参加につなげることができた。

一方で、不参加の住民への聞き取りでは「仕事が忙しい」「集いの場に行くことが苦手」などといった声も挙がり、参加が難しい背景も明らかになった。「一人でも多くの人に参加してほしい」という参加者からの意向もあるため、参加につながりにくい住民に対しての働きかけが今後の課題となる。

集いの場の開催により、住民同士の交流は目に見えて活発になった。借用したレクリエーション用品のモルックを手作りするなど、参加者が主体的に活動を工夫する姿も見られた。

また、目の不自由な参加者からは「週1回の楽しみになっている」「外出の頻度が増えた」との声も挙げられた。アンケートでは現在の興味や関心についての項目を設け、回答を得ることができた。共通の趣味を持つ者同士がつながることのできるような、西原村全体での新しいサークル活動への創設も視野に入れ、今後も活動を進めていきたい。

山西団地



ちょっと
寄っていかんね

参加自由

公民館 開放します!!

初回 4月23日(水)
13:30~15:00

気軽に

楽しく

おしゃべり

🌸 毎週水曜日 13:30~15:00
皆さんで集まる機会をつくりませんか？

🌸 「自由に来て自由に帰る」
これがモットーです!!



🌸 皆様のご参加お待ちしております♪



事業名称



「中山間地域の地域福祉推進モデル事業」 ～七滝nana色クラブ・nanaヨガ教室の取り組み～

- 生活支援
- 買物支援
- 移動支援

- 見守り
- 居場所作り
- 協議体

市町村名：御船町
部署名：福祉課地域包括支援センター
連絡先：096-282 - 2911

地域の概要

御船町は、熊本県のほぼ真ん中に位置し、「恐竜の郷」としても知られている。また、熊本空港や熊本市街地へのアクセスも良く町の7割が中山間地で、吉無田高原など自然の豊かさに触れられる点も魅力である。七滝地域は御船町の中心地から車で20分ほどの中山間地に位置しており、中山間地域の中で唯一国道が通り、郵便局が地域の拠点の役割を果たしている。

また、昔ながらの暮らしや行事が今に受け継がれ、地域住民の結びつきが強く結束力がある地域である。

しかし、年々人口も減少し現在の人口は465人ほどで、65歳以上の高齢者数も260人の高齢化率55.9%と高齢化が進み、特に近年では閉じこもりがちな一人暮らしの高齢者の増加や移動手段の確保も課題となっている。

七滝



取組みの背景

○七滝地域に介入することになった理由

- ①第8期介護保険事業計画に基づき御船町が実施した健康とくらしの調査結果で、友人知人と会う頻度が高い者の割合及び交流する友人がいる者の割合等が前回調査より低下
- ②介護予防事業「元気クラブ」参加者の減少
- ③地域サロンの衰退（参加者減少・サロン活動休止等）
- ④七滝地域では豊富な社会資源があるのに活かされていない。

（公民館・地区社協・郵便局・個人商店の移動販売・元気組活動【既存の住民組織】…）

住民ワークショップの様子



実施までの流れ

七滝地域の公民館長・地区社協会長・区長代表・民生児童委員・福祉協力員・元気組・町福祉課（地域包括支援センター）職員・町社協職員（SC含む）をメンバーとした、住民ワークショップを計4回実施。

◎内容：各グループに分かれ、相手が求めていること、もうすでにやっていること、私（達）にできること等について意見を出しあった。

その後、これから実施する内容や予算、年間計画等を話し合う企画会議を計4回実施。



七滝でやりたいこと、できることを各グループで出し合い整理

取組みの概要

☆まずは、これから始まる活動がより活発にいつまでも継続し、七滝住民の愛着がわくようにという思いから名称を七滝の「なな」と七滝にかかる虹の「7色」をイメージして、活動の一つ一つに「nana」の文字を入れ活動が始まった。

○七滝nana色クラブ（通いの場）

七滝地域の住民が集い、安心・安全な暮らしができるようふれあいの場をつくり、閉じこもり防止や仲間づくり等の七滝地区の福祉の向上を図ることを目的として、立ち上がった。

（月1回 10時～12時）

内容：レクリエーション（ゲーム）、健康体操、クリスマス会、地域の高齢者の方が講師となって竹ぼうき作り、e-スポーツ

音楽療法（平成音大准教授及び講師）、等

○nanaヨガ教室（サポーターのスキルアップ）

外部からヨガの講師を招き介護予防生活支援サポーターや一般の地域住民も参加型で開始。

（毎週木曜日 19時～20時）

○その他の取り組み（協力者の養成及び担い手の発掘）

- ・介護予防・生活支援サポーター養成講座 修了者：16名
- ・生活たすくメイト養成講座 修了者：12名
- ・支え合い型移動支援運転者講習会（講師：ふくし生協）修了者：11名

（※活動初年度実績：R4）

e-スポーツの様子



竹ぼうき作りの様子

nanaヨガのメンバーでハイポーズ



生活支援コーディネーターの役割

- ・高齢者だけでなく子どもも参加し楽しんでもらえるような集いの場の内容（特に世代間交流）の提案（他市町村の取り組み等の事例を紹介する等の情報提供）及び事業者との連絡調整（例：e-スポーツ事業者ハッピーブレイン）
- ・休止となっていた地域サロンの再開に向けた新たなサロンの立ち上げ支援
- ・気軽に安心して参加ができるよう活動中に起きた参加者の怪我や事故に備え、行事用保険（社協の保険）の加入手続きの支援
- ・七滝地域の見守りネットワーク連絡会（座談会）をとおして、閉じこもりがちな高齢者等を把握し、nana色クラブ等の周知及び活動への参加の呼びかけを実施
- ・七滝地区社協とnana色クラブ等との連携及び連動した活動となるよう話し合いの場の企画及び参加

今後に向けて

七滝地域では、nana色クラブをはじめ様々な取り組みが始まったことで地区行事への協力者やイベント等にも年々参加者も増えてきており様々な面で波及効果が生れている。

また、新たに七滝地域内において、元気組メンバーによる手料理を味わえるコミュニティカフェ「茶屋小屋だっでん」が2025年8月にオープンし、住民主体で高齢者を対象とした配食サービスも始まりますますます活気づいている。

ただ、一方で人口減少による区役（清掃活動 等）が維持できなくなりつつあるなど、課題も多い。

今後も引き続き関わりながら、七滝地域だけではなく町内全域に広がっていくよう生活支援コーディネーターとして新たな地域資源を発掘しそれを繋ぎ活かしながら多様な主体（地域住民・介護予防・生活支援サポーター 等）とも連携・協力する地域づくりを目指し活動していきたい。

事業名称

サロン活動支援事業

- | | |
|--|---|
| <input checked="" type="checkbox"/> 生活支援 | <input checked="" type="checkbox"/> 見守り |
| <input type="checkbox"/> 買物支援 | <input checked="" type="checkbox"/> 居場所作り |
| <input type="checkbox"/> 移動支援 | <input type="checkbox"/> 協議体 |

市町村名：山都町
部署名：山都町社会福祉協議会
連絡先：0967-82-3318

地域の概要

山都町は熊本県中央部、阿蘇外輪山の南側に広がる自然豊かな町です。面積は544.67km²と県内で3番目に広い面積です。人口は令和7年11月末で12,511人、世帯数は6,183世帯、高齢化率が52%を超えており県内で1番高い高齢化率となっています。山都町には住民同士のつながりや気の合う仲間が集まられているサロン、地区福祉会やシニアクラブが中心となって開催されるサロンがあります。参加者同士で顔を合わせおしゃべりする事で楽しい時間を過ごすことができ介護予防や生きがいづくり、見守り活動にもつながっています。



取組みの背景

以前から生きがいと健康づくりを目的にサロン活動をされている団体の支援を行っていました。平成30年度に地域の中で何気なくしている事が介護予防や見守りにつながっていて“地域のお宝”になり、これからも続けて頂きたく、町内の皆さんに知って頂きたい思いも込めて事例集を作成しました。また、「地域でどんなサロンが行われていますか。」、「内容がマンネリ化してお勧めの活動はありますか」などの声をお聞きしました。取材を通して知ることができたサロンと特技をお持ちの名人さんを見える化してサロンの支援を行う事としました。

実施までの流れ

町内のサロンや集まりを開催されている代表者などに連絡し取材を行いました。また、各地域のサロンやお祭りなどで特技を披露されている方の情報もお寄せ頂き取材を行いました。令和4年度にサロンマップ、名人さんマップについては、完成後、地区福祉会や民生委員児童委員、ケアマネージャーへ配布する事としました。



取組みの概要

サロン活動支援の内容

- ・活動計画の助言
- ・サロンへの職員派遣

令和4年度	27回
令和5年度	43回
令和6年度	41回



- ・レクリエーション道具の貸出

令和4年度	12回
令和5年度	54回
令和6年度	86回

- ・サロンマップ、地域のお宝名人さんマップの作成とマッチング

令和5年度	16回
令和6年度	13回

- ・情報発信
- ・活動助成金の交付 など

生活支援コーディネーターの役割

年間計画や内容についての助言、講話や手工芸依頼時の職員派遣、利用者の方とお茶のみなどで情報交換、お宝名人さんのマッチング、レクリエーション道具の貸出事務、活動助成金交付事務、情報発信など行っています。



今後に向けて

少子高齢化が進む中、現在のサロンが無理なく続いていくように、代表者や参加者の声を聞きながら必要な支援をこれかも続けていきたいと思ひます。



事業名称

新たな男性向け通いの場創出事業

- 生活支援
- 買物支援
- 移動支援

- 見守り
- 居場所作り
- 協議体

市町村名： あさぎり町
部署名： 高齢福祉課
連絡先： 0966-45-7215

地域の概要

あさぎり町の総人口は、令和7年11月末現在で13,769人。その内、65歳以上の人口は5,563人で、高齢化率は40.4%。介護保険認定率は令和7年11月末現在で16.9%。

あさぎり町は上・免田・岡原・須恵・深田の5地区、53行政区で構成され、あさぎり町における地域の通いの場は、令和7年11月末現在101か所で開催されている。

取組みの背景

令和5年度の包括ケア会議にて「高齢男性の社会参加が少ない」という地域課題が挙がり、男性サロン代表者、男性介護予防サポーターを対象にアンケートを実施し、高齢男性の社会参加を促す方法を検討。地域で孤立しがちな高齢男性等が通える場づくりや仕組みづくりを生み出し、地域の支え合い活動の展開と助成を目的として、令和6年度から事業を開始した。

実施までの流れ

○令和5年度

- ①男性サロン代表者、男性介護予防サポーターを対象にアンケートを実施
- ②高齢福祉課と生活支援コーディネーターで協議・検討

○令和6年度～

- ③社会福祉協議会にて要綱を作成し、高齢福祉課で精査
- ④広報誌等で事業周知、町内の申請団体を募集
- ⑤高齢福祉課、社会福祉協議会にて内容審査の協議を行い、申請団体を選考
- ⑥申請団体に交付決定を通知
- ⑦申請団体に補助金を交付
- ⑧申請団体から実績報告提出

取組みの概要

町内在住の高齢男性等が通える場所づくりや仕組みづくりを協議し、地域の支え合い活動を展開することで、認知症予防・孤立防止と社会参加の促進につなげる居場所づくりを行う。

活動対象者は、行政区、グループ等を単位として、活動する構成員の半数以上が65歳以上の男性であることが条件で、男性が通える場づくりや仕組みづくりについて新たな活動もしくは活動を再開するものなど、団体の実情に合わせた特色のある取組みを募集する。

活動助成金は予算の範囲内で交付するものとし、補助金額の上限は、1ヵ所4万円以内。(交付された補助金額のうち、2分の1以上の金額を食糧費として使用できない等の条件あり)

○令和6年度活動地区

- ・上地区 下永里
- ・上地区 塚脇
- ・免田地区 八幡町
- ・須恵地区 覚井



▲ピザ作りを楽しむ会（八幡町）

生活支援コーディネーターの役割

- ・包括ケア会議へ参加し、地域の課題を発掘する。
- ・地域の集まりの場へ参加し、地域の実情を把握する。
- ・要綱作成のための助言、サポートを実施。

今後に向けて

町、社会福祉協議会、生活支援サービスを担う団体等で引き続き連携し、生活支援コーディネーターの活動の支援・協力を行うとともに、移動支援サービスの充実をはじめとして、町の実情と高齢者のニーズに合った新たな生活支援サービスの創出を検討し、高齢者の社会参加の推進につなげる。

事業名称

介護予防拠点事業 ～住み慣れた地域で自分らしく過ごすために～

- 生活支援
- 買物支援
- 移動支援

- 見守り
- 居場所作り
- 協議体

市町村名：山江村

部署名：健康福祉課地域包括支援センター

連絡先：0966-23-2232

地域の概要

山江村は、球磨郡の西北部に位置し、面積の90%は山林で、南は人吉市、北は八代市及び五木村に接しています。

人口：3,143人（R7.4.1）

世帯数：1,196件

高齢化率：38.18%

少子・高齢化が進み独居高齢者が増加してきています



取組みの背景

調査により、加齢に伴う外出頻度の低下と、それに伴う閉じこもり・心身機能低下のリスクが確認されました。

一方で、多くの住民から地域づくりや企画運営への参加意向が確認できました。

平成29年4月開始の介護予防・日常生活支援総合事業の趣旨に基づき、住み慣れた地域で楽しみと生きがいにつながる場として、介護予防拠点事業（地区サロン）を推進することになりました。

実施までの流れ

- ・平成30年 16地区中5地区で開始。
- ・令和元年 普及啓発を全地区に実施し、11地区へ拡大。
- ・令和2年 7月豪雨災害の影響下で“みんなの家”にて週2回のサロンを実施、16地区中15地区で開催。
- ・令和3年 コロナ禍で自粛しながら継続。
- ・令和5年 公民館までの移動課題へ対応し、徒歩圏での拠点整備を進め、全体で20ヶ所に拡大。体操の効果向上を目的に専門職と連携した交流会を開始。
- ・令和6年 “みんなの家”での活動を終了し、19ヶ所で実施。
- ・令和7年 交流会のさらなる充実と評価の強化。

取組みの概要

各地区の介護予防サポーター、区長、民生委員の協力により、体操・ゲーム・タブレットを活用した脳トレ・グラウンドゴルフ等、多様な活動を実施されすべてのサロンで体操を取り入れています。保健事業と一体化し、保健師・栄養士・歯科衛生士が介入、作業療法士も加わり運動の質向上を図っています。

介護予防健診に加えて令和7年度から骨密度検査を導入し、骨粗鬆症の早期発見・早期治療を推進しています。



(体操の様子)



(介護予防健診 骨密度検査の様子)

生活支援コーディネーターの役割

- ・サロンや地区訪問による聞き取りや調査の実施。
- ・困りごとや地区の課題に対しての情報共有と課題解決に向けた取り組み。
- ・地域毎のネットワーク構築。

今後に向けて

- ・介護予防健診から受診・改善までの導線強化。
- ・地区によっては介護予防サポーターがいない地区もあるため、ボランティアの育成・定着。
- ・介護予防サポーター研修（交流会・フォローアップ）、感謝・表彰。

